
生きていく理由（わけ）

麻真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生きていく理由

【Zマーク】

Z6395E

【作者名】

麻真

【あらすじ】

なんとなく生きていた高校生の主人公の生活に、大きな変化がおとずれる。いやでも生きるということを考えなければならなくなつた主人公が出す結論は…

「いつたじどこでいくら借りてるの！？全部書き出してみなさいよ！」

またやつてる。あたしは弟と顔を見合わせる。最近、ずっとこんな感じ。無理もないか。昼間あれだけ金返せつて電話がかかればね。父親が母親に内緒で借りたお金を、みんな母親の方に請求してくる。母親の内職の給料が今日入るから、それで返すと言つて、あちこちでお金を借りてまわつてたらし！

「勝手に人の給料あてにして借錢して、借りたらもうつた気になつて使うんだから！こつちが稼いだお金まで全部持つていかれたら、あたしらどうやって生活したらいいっていうのよ！…」

「しょうがないだろ。夫婦っていうのはそういうもんだ。片方がしんどいときにはもう片方が助けるのが当たり前。どこの家でもそうしてるだろ。」

父親は軽く答えた。ここはいつも自分のことしか考えてない。自分が家族を養わなきやならないなんて、思つてもいよいよ。借りたお金は生活費に充てたわけではないから、どうせ、他の借錢を返すために借錢したんだろう。なんでこんなだらしない人間にお金を貸す人がいるのか、不思議でたまらない。母親が言つには、こいつの外ヅラがいいから、みんなだまされるらしい。

父親は少し前まで、小さい工場を経営していた。母親もそこで働き、何人か従業員さんもいたのだけど、ある日気付いたら、工場には誰も来なくなつていた。母親がぼやいているのを聞くと、知らないう間に工場にいらない機械ばかり買つてきて、使いもせずに投げておくようなことをしてたから、借錢が膨らんで会社はつぶれたといふことらしい。それ以来、父親がまともに働くとしてる姿を見たことがない。困った母親は、工場が関わつてた会社の内職を始めた。それからは、少ない給料の中でやりくりして、母親一人の収入で父

親まで養つてきた。電気代や電話代など、請求書がきたらもうりん全部母親が払つている。

最近、父親の方も、わけのわからない営業を始めたとか言つてゐるけど、

「田舎はみんな共働きだから、昼間行つたつて誰も家にいない。夕方ちょっとと回つて来ればいいんだ。」

つて、母親がろくに寝ないで内職してゐる横で昼寝。夕方から出かけていつたら、自分で夕飯をすませて帰つてくる。当然儲かるはずもなく、相変わらず生活費は入れていない。自分の小遣いだけ稼げばいいと思っているのだろう。借金を返そうなんて気もないようだ。工場がなんとか続いているつちは、特別仲がいいわけでもなかつたけど、こんな父親とでも家族として、何の疑問を感じることもなく生活してゐた。今となつては、こんな人間のことをよく「お父さん」なんて呼んでたものだと思つ。

内職をしている母親に声をかけるときには、気をつけないといけない。虫の居所が悪かつたら、いきなり怒鳴りつけられるから。今なら大丈夫かな。

「母さん、今日学校でもらつたプリント。懇談で進路の話があるから、できるだけ親に来てもらえて…」

「うるさいわね！忙しいんだから、そんなもん行けるわけないでしょー。自分のことなんだから、あんたがちゃんと聞いとけばいいじゃない！」

やつぱりこつなる。この人は私たちに「ご飯を食べさせること」で頭がいっぱい。それ以外の話をする心の余裕はない。

「手伝おうか。」

少しは役に立てないかと声をかけてみた。

「いいよー。どうせろくなことできないんだから。あんたらが騒いでたら仕事がはかどりやしないから、さつさと自分の部屋へ行きなさい！」

そりや、慣れない内職手伝つたつてうまくできやしないけど、こんな言い方されちゃ、もつ話しかける気にもならないや。弟と田で合図をすると、あたしたちはその場を離れようと立ち上がる。

「子供にそんな言い方しなくてもいいだりつ。少しほかわいがつてやれ。」

あいつが横から口をはさむ。

「かわいいなんて思つてるんなら、『ご飯くらご食べさせてやればいいでしょ！死んだらどうするの！』

お互い、相手の非だけは見えるらしき。

家にいるのはイヤだし、一応学校には行つてる。高2になつて進路を決めろつて言われるけど、ほとんどが大学行くつちの学校じや、入つてくる情報はあたしに関係ないものばかり。大学どころじやないよ。弟はまだ中学生だから、あたしが高校やめて働いたほうがいいかと思つてゐるのに。

別に進学しようと思つてこの学校を選んだわけじやない。自転車で通えるところで、ほゞほゞ成績に合つたところがここしかなかつたから決めたつて感じ。高校を受験する頃はまだ親の工場もあつたから、高校を卒業したらつちを手伝うんだと、なんとなく考えていた。

高校生活をそれなりに楽しめるだろつと期待していたのに、入学してすぐ大学受験の話ばかり聞かされて、一週間で学校をやめたいと思つた。でも、やめてどうするあてもないから、今までなんとなく続けている。運動は苦手だから、クラブは文芸部に入つた。だけどそれも楽しくなくて、部誌にのせる詞は愚痴のよつなものばかり。毎日がたいくつだつた。

一年の終わり頃から、時々授業をサボつて文芸部の部室で暇をつぶすようになつた。もつすぐ建てなおすことが決まつてゐるボロ校舎の中一階。こんなところに部屋があるなんて気付かない人のほうが多いような場所だから、ここなら邪魔が入ることはない。あたしが

いないからって、困る人も探す人もいない。移動教室のときなんて、いないうとに誰も気付かないで、出席したことになつてたりする。

中学の頃は勉強もできたし、先生の言つことも素直に聞いていたから、いい子のレッテルを貼られ、大人からはかわいがられていた。でも、そんな自分がおかしかったことに、最近気付き始めた。親の言つことも先生の言つことも、間違つてることがたくさんあるじゃん。適当に過ごしてるように見えた周りの子たちの方が、私なんかよりずっとたくさんのことを見たかったんだ。大人に言われる通りにしか行動できなかつたあたしは、本当にバカだつた。

学校という場所では、成績がよければ、たとえ人の輪の中に入れなくても、それなりの居場所が用意されている。だけど、同じような学力の人たちの中に入つたら、あたしはなんのとりえもない人間。もう特別扱いしてくれる先生もいない。いい大学に通つて進学率でも上げれば学校は喜ぶんだろうけど、そのために寝る暇を惜しんで勉強する気にはなれない。合格したって、どうせ大学なんか行けないんだし。入学した時より成績もずいぶん下がつていたけど、そんなことはもう、別に気にならなくなつた。進学しか考えていないクラスの子たちとも、だんだん話が合わなくなつてきて、今ではあまり口を聞かない。

これまでずっと、なんとなく生きてきた。でも最近、急にすべてが「なんとなく」ではすまなくなつてきいていた。親、学校、友達、今までこういうものだと思つてきた形が、ことごとく崩れていく。特別楽しいことがあるわけでもなく、やりたいこともない。あたしを邪魔だと思う人はいても、必要としてる人は一人もいない。望んであたしたちをこの世に送り出してくれたはずの親さえ、どう見てもあたしたちが存在していることを喜んでいるようには見えない。誰のために、あたしは生まれてきたんだろう。何のために生きているんだろう。この頃、気がつくといつも、どうして生きてなきやならないのかつて考えてる。なんの役にも立たない、こんなあたし。

生きてたって死んでたって、何も変わりない。

だけど、死のうとしたことはない。積極的に死にたいとまでは思わないから。ううと、死にたいはずなんてない。ほんとは生きたいんだ。生きてることに何か意味を感じながら、生きていたいって、心の底では思つてるんだと思つ。

最近母親は体調が悪いらしい。あれだけ働けば無理もない。人が倒れたら、うちはいつたいどうなるんだろう。あたしが弟を養うことになるのかな。それだけじゃない。あいつが作ってきた借金まで、あたしに回されるかもしれない。あたしが学校をやめたとして、いつたい何をしてお金を稼げるだろう。あたしが働いたら、どのくらいお金をもらえるんだろう。

うちの学校はアルバイト禁止。でもそんなこと言つてらんない。日曜日、学校に無届けでバイトを始めた。農園の裏方。ここなら多少見つかることはない。

「家はどこ？お父さんの名前は？」

隣で作業してるおばさんが話しかけてきた。まだ。田舎では、初対面の大人は必ず同じ質問をしてくる。親が誰かを知らなきや、あたしつて人間と付き合えないらしい。言いたくなくて黙つてたら、

「お父さんは何の仕事してるの？」

次もお決まりの質問。めんどくさいな。あいつが昼間何してるかなんて、そんなこと知るかよ。

「知りません。」

「え？お父さんの仕事知らないわけないでしょ。」

知らないから知らないって言つてるんだよ、しつこいな。

「…おかしな子ね。」

答えないあたしに、不審な人間を見るような目を向ける。家のこと聞かれたくない人間もいるんだよ。いきなり土足で踏み込んで、何が「おかしな子」だ。大人だっていうなら、空氣くらい読めよ。えたいの知れないあたしが気になるらしく、そのおばさんはしつ

「ぐく私にからんできた。

「そ、うじやないつて！何回言つてもわからんない子だね。親の名前も言えないんだから、頭が悪いんだね！」

ひとことひとこと頭に来るおばさんだ。学校やめて働くつて簡単に言つてたけど、そうするつてことは、毎日こんな生活に耐えるつてことなんだ。あたしにはできそつにない。学校をやめたつて、お金を稼げなかつたらなんにもならない。あたしはとことん役立たずだ。

「どこの遊びまわつてたんだ？」

疲れて帰ると、いきなり父親につかまつた。

「バイト。遊んでなんかいなよ。」

「そんなことしてる暇があるのか。最近成績はどうなんだ？」

「どうでもいいじやん、そんなこと。」

「どういう口のきき方だ！いい職につくつと思つたら、勉強くらいできなきや駄目に決まつてるだろー！」

「いい職につく？働く気のないおまえが言つたとかよ。

「勉強してどうなるつていうの？どうせ大学に行くわけじゃないでしょ。」

「大学に行けばいいじやないか。」

こいつ、バカじゃないの？誰がお金を出してくれると思つてるの？

「大学なんて行かないよ！」

「そんなこと言つてるようじや、おまえは将来ろくな仕事につけないな。そこら辺の店員にでもなればいい。」

ろくに働きもしないヤツが、なんで働いてる人のことバカにしてるんだよ。

「店員のどこが悪いの？！働かないよりずつといいでしょ……」

言い過ぎたかなと思つて、チラツとあいつを見た。あたしは目を疑つた。「手におえないな」とでも言いたげに、さげすむような目があたしに向けられていた。こいつ、本当に自分の姿が見えてないん

だ。働かない人間てのはあんたの「」よ。 軽蔑されてるのはあんたの方なんだよ。

「容子！」

「久しぶり。」

中学の同級生の容子。高校は違うけど、今一番仲がいい。

クラスの子には10話しても、1か2しかわかつても「られないから、あきらめて何も話さなくなつた。だけど容子は「言えれば10わかつてくれる。そして不思議なことに、会いたいと思つたときに電話をくれたり、偶然会つたりするんだ。今日もそう。道端でバッタリ出会つた。

事情はよく知らないけど、容子は両親が生きているのに、おじいちゃんと一緒に一人で暮らしている。だから他の同級生たちにわからないことが、容子にはわかるんだと思う。つまく説明できないけど。

容子といふと、つい家のことと愚痴つてしまつ。

「父親がいなきや、どんだけ生活が楽だらうと思つよ。生活費も入れないくせに、H(アホ)うそに説教ばつかしてさ。町中に借金作つてまわつて、あたしら恥ずかしくて外歩けないじやん。田舎じや何するにも親の名前がついてまわるから、これからあたしも弟もろくな人生歩めないよ。」

「そんなこと、もう決めちやうわけ?夢も希望もないじやん。」

「仕方ないよ。うちは普通じゃないから。」

「普通…か。どうこうのが普通なの?」

「…お父さんがいて、お母さんがいて、仲良く暮らしていけるっていうか…」

「そりひつむからつて、仲がいいとは限らないじやん。あんたんちだつて両親そりひつむんだよ。」

「…そつか。」

あたしの戸籍には両親の名前がある。形だけは整つてるけど、そんなことがなんだつていうんだろ?。いない方がいい親つてのも、こ

の世にはいる。

容子と話をしている途中、父親の車が通りがかった。一瞬目が合い、通り過ぎていく。めんどくさいな。帰つたら、じつせまた何か口出しされる。

「わしき、あの容子とかいう子と会つてただひつ。

家に帰ると、予想通りあいつに呼び止められた。

「それがどうかした？」

何を言われるかは大体わかつてゐるけど、わざととぼけてみる。

「友達は選べ。あんな親がいないうような子とつきあつんじやない。

「親がいないう子のどこが悪いの？あんたにそんなこと言われる筋合いはないよ。」

「親が子供のことに対する口を出すのは当たり前だろつ！待ちなさい！」

何が親だ。自分がどれだけの人間のつもりで、容子のことそんなふうに言えるんだ。友達はちゃんと選んでつきあつてるよ。あんたみたいな親がいる方が、親がいないうよりよっぽど恥ずかしいんだ。親は選べないから、仕方なくこの家に帰つてくるだけ。おまえなんか親だなんて思つてやしない。

そばに刃物があつたら、こいつを刺してしまうかもしれない、時々そう思つときがある。たまたま手元に刃物がなかつたから、今までそんなことをしないでしんでいる。もしあたしがそんなことをしてしまつたら、あたしは殺人犯で、弟と母親はその家族。今どきじやなく、生きてるのが大変になる。我慢するしかないんだ。

なんであたしはあんなヤツの子供なんだろう。同じ血が流れてると思うと、手首を切つて身体中の血を全部捨ててしまいたくなる。

「あんな父親養つてゐるより、離婚したほうが楽なんじゃないの？」

母親と一人きりになつた時、言つてみた。内職の手を止めることがなく、母親は答えた。

「あんたらのために我慢してゐるんじよ。離婚したら、将来就職や結婚にさしつかえるんだから。」

「そんな理由であたしを選ばないような会社や人間なんて、こっちからお断りだよ。あんな父親がいるせいで、今いろいろ困ってるじやん。そのほうが問題なんじゃないの？」

「あんたはまだ子供だから、わからないのよーーー。」

あたしたちのため？そんなふうに言われたつて、ちつともうれしくない。こんな状態で一緒に暮らしてること、本当にあたしたちのためになつてると思ってるの？人を殺したいほど憎むなんて、どう考えても幸せじゃない。離婚する勇気がないのを子供のせいにしてるだけなんじやないの？

「なんで私がこんな大変な目に合わなきやならないんだろう。」

母親が、いつものようにぼやき始めた。

「だいたい私は結婚なんかしたくなかったのに。親に無理やり結婚させられてこんなことになつて……子供だつて欲しくなんてなかつた。でも、結婚したら産まなきやならないじゃない。あんた達がいなきや、ひどなとこわつて出でていつて好きなことするのに。」

やさしいから、こんな話聞かせられないよ。

「…へえ。じゃ、一人だつたら何がしたいの？」

「友達つくつて会いたいときだけ会つて、楽しんだらバイバイ。気

「楽でいいじゃない。」

「……それが楽しい？」

子供なんか育てるより、お気楽に生きてる方がいいってか。かわいそうな人。この人には自分の意志もなければ、生きがいもないんだ。子供が邪魔だと思つてることくらい、口に出して言われなくて

も態度でわかつてたから、いまさら傷ついたりしないけどね。今まで感じてたことが事実だったと、はつきり確認しただけ。

でも、この人は逃げずに責任とつて、エサだけはくれてるんだか

ら、ありがたいと思わなきや。自分の無責任さにも気付かないで、上から理屈を押し付けてりや子供は育つと思ってる、あの父親よりはよっぽどましだ。

ある日の放課後、忘れ物を取りに教室に戻つたら、女子が数人かたまつていた。一人が机に伏せて泣いてて、みんなでそれをなぐさめてる感じ。別に聞こうとしたわけじゃないけど、泣いてる子の話が聞こえてきた。

「あたしがいるせいで、お母さんの再婚話がダメになつたんだ。お母さんに、おまえさえいなきや、って言われてさ。私なんて、生まれてこなければよかつたんだ。お母さんに申し訳なくて…生まれてきごめんなさいって謝るしかなくて…」

聞いてらんなくて、すぐ教室を出た。他人事なのに、ムカついて仕方ない。

なんでそうなるの？バカじゃない？産むつて決めたのは親なんだよ。なんでその人に、生まれてきてゴメンなんて言わなきやいけないの？冗談じやない。あたしは絶対にそんなこと言わない。親にとつて邪魔な存在でも、あたしにとつてはたつた一人しかいないあたしなんだよ。

教室を飛び出すと、誰もいない部室に駆け込んだ。机のペン立てにあるカッターナイフを取り、そばにあつた雑誌に力いつけばい切りつける。もつとズタズタにしたいのに、私の力じやたいした傷もつかない。悔しくて、壁に投げつけた。バサッと音をたてて、雑誌が壁際に落ちる。肩で息をするほど疲れているのに、いくらあたしが暴れても、何も壊れやしない。壊してやりたい。何でもいいから、ボロボロにしてやりたい。この壁。そう、これがいい。どうせこの校舎、来年には建てなおすことが決まつてるんだから、壊したつていいよね。あたしはイスを振り上げて、壁に向かつて思い切り叩きつけた。薄そうに見えるベニヤ板は思ったより丈夫で、はね返されたイスが足に当たる。痛いな、このやうう…一壊れろよ！壊れろ！

自分の声が自分のものじゃないみたい。悲鳴のような声をあげながら、何度も何度もイスを振り下ろす。ついに壁にヒビが入った。

大きな音を聞きつけて、先生がやってきた。

「何してるの？！あ……！壁が壊れてるじゃない！なんでこんなこと

…

「ちょっとイライラしたから。」

「たったそれだけの理由で、こんなことを？もつすぐ壊す校舎だから、修理しろとは言わないけど、このことは親に報告するわよ。」

「……いいんじゃない？」

「は？他人事みたいな言い方しないでよ。」

親に言つても別に何も変わらないよ。の人たちは子供のことなんか見てやしないんだから。どうせやめようかと思つてる学校だもん、退学になつたつてどうつてことないし。好きにすればいいじゃん。

「こんな日は容子に会いたい。」なんとき、容子はいつも帰り道に立つてゐるんだよね。自転車をこいで容子の家の近くにさしかかると、夕焼けを背にして、やつぱり容子が手を振つていた。

「今日は会いたい気分だつたんだ。」

「またなんかあつたの？」

容子は慣れたものつて感じで、軽く笑つた。容子には、あたしのことなるて全部お見通しなんだ。

「今日や…」

容子は黙つてあたしの話を聞いていた。

「ええ？壁に穴あけちゃつたの？アハハ！何やつてんの！しかも、もつすぐとり壊すとこやるなんて、あんたらしいわ。」

「先生に見つかって、親に連絡するつて言われちゃつたよ。」

「怒られるんじゃないの？」

「さあね。怒られたつて別にどうつてことないし。」

「あんま、親に心配かけない方がいいよ。」

「心配なんかしてないって。父親が気にしてるのは世間体ばつかだ

し、母親は子供が何してたって、興味ないんだから。カツ「気にするんなら、ちやんと働けっての。おまえが一番ダサいんだって。母親に養つてもらつてや。母親には感謝はしてるけど、ただ流されて生きてるって感じで、あんなふうにはなりたくないや。子供なんかほしくなかつた、だつて。ほしくない子供なら産まなきやよかつたじやん。」

「お母さんがあんた産まなきや、あんたは今ここないんだよ。生まれてこなかつたほうがよかつたと思う?」

「そつは思わないけど。でも、あたしが生きることに何か意味があるのかなつて、最近いつも考えてるよ。」

「あるに決まつてるじやん。」

「生まれてきたことを、誰も喜んでなくとも?」

「そつだよ。てか、生きてる意味なんて、自分で作るものなんじやないの?」

「自分で?」

「だつて、生まれてきたからには、人生は自分のもんじやん。親が望んでなかつたとしても、自分が生きていたいつて思つてるでしょ。」

「うん…まあ、そうだね。」

自分が望んでれば、この世に1人は生まれたことを喜んでる人がいるわけか。

「あたしの親も、もしかしたらあたしが生まれること望んでなかつたのかもしけないけどさ、でも、生まれてなかつたら、今こうしてあんたと話すことできなんだよね。」

「それは困る!あたし、容子がいないとビリしていいかわからないよー。」

「なんだ?それ。ま、ちょっとつれしいけど。」

容子はクスリと笑つた。

「せつかく生きてるのに、いじけて時間をムダに過ごしたくはないな。流されてるのはお母さんだけじゃないと思つけど。」

「え？ あたし…？」

「泣いてた子もあんたも、あんまし変わりないと思つよ。親がどん
なだから自分がいつなんだつて、あきらめやつてぬじやん。」

「そつか…」

生きてる気がしないのを親のせいにしてるあたしも、あの子と同じ
ようなもんなんだ。

「自分の人生じやん。親がどうでも、自分の好きにすりゃいいんじ
やない？ あんたはいつたいこれかうどうしたいの？」

「…わかんない。」

「まず、それ見つけたら？」

「うん…、容子はもう見つけてるの？」

「あたしは、親と暮らせない子をあずかる施設で働きたいと思つて
るんだ。どうやつたらどういう仕事につけるか、今調べてるところ。
あんまりお金がかかるよつたら、あきらめなきやなんないけどね。
「そつなんだ。容子なら、いろいろ相談にのつてあげられそうだも
んね。」

「自分が同じ立場にいるからね。自分の経験を誰かのために役に立
てられたらいいと思わない？」

「…容子はすうじいな。ちゃんと夢を持つてて。」

「誰だつて、夢を見つける」とへりこどめるよ。むつかうかはわ
かんないけど。」

「誰でも…か。あたしにも見つかるかなあ。」

「見つかるよ。」

「あんな家にいても？」

「だから、夢を見るのに、親は関係ないって。親がイヤなら、高校
卒業したら家を出ればいいじやん。」

「そつか。」

あたしも自分でどうにかすればいい。ううん、自分でどうにかしな
きやいけないんだ。

「あんたは普通の家庭がいいみたいに言つてたけど、あたしは平和

な家庭で過ごしてゐる人がかわいそうに思えるときがあるよ。あたしらが感じてゐる、こんなたくさんの気持ち、知らずに過ごしてゐるんだからね。」

「…そうだね。」

あたしたちは今、誰にでも見れない景色を見ている。容子は自分の置かれてる状況を、マイナスではなくプラスにとらえているんだ。あたしみたいに腐るんじゃなくて、それを活かして生きるってこともできるんだね。今は容子に頼つてばかりのあたしだけど、もしかしたらあたしも、いつか容子のように誰かの気持ちをわかつてあげられる人になれる？あたしもあたしの見てきたこの景色の上に、何かを積み上げていくことができるのかな。

「ありがとう、容子。今日は帰るわ。」

「暗くなつてきちゃつたね。気をつけて帰りなよ。」

「うん。じゃ、ね。」

手を振つて、自転車をこげ出す。まだほんのり残つてゐる夕焼けの色が、明日の朝日につながつてゐて、初めてそんなふうに思った。

親なんていらない。別にいらない。私が生まれてることを親が望んでたかどいかなんて、そんなのもう、どうだつていい。私は自分の意志で生まれてきたんだ。命をもらつてしまえばこいつのもの。この人生は私のものだ。

他の誰が望んでいなくとも、私が望んでるから、私はきっと生きていける。誰にも必要とされていないなら、誰かに必要とされる人になつて、自分で居場所を作つていけばいい。誰も愛してくれてないなら、誰かに愛される私になつて、新しい人間関係を作つていけばいい。私が私をあきらめないで、頑張つてれば、きっとそんな時が来る。

こんなどうしようもないヤツでも、自分で人間はひとりだけ。まづ自分が愛してやらなきや、何も始まらない。誰に望まれたからじやなく、私は私のために、これからも生きていく。そして、子供を

産んだら殴つてやるんだ。
「あたしはあんたに会いたくて、あんたを産んだんだよ。」
つて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6395e/>

生きていく理由（わけ）

2010年10月10日03時30分発行